

平成 30 年度 幼児児童生徒の聴力の実態

良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用者数

土手 信・桑原美和子・吉野賢吾・太田康子・石津勝基・長島素子・奥野功三・石井清一

平成 30 年度、本校に在籍する幼児児童生徒の良聴耳平均聴力の分布を学部及び全校に分けて報告し、そこから読み取れる傾向や特徴について明らかにする。また、人工内耳を装用している幼児児童生徒の実態を集約し、学部及び全校の状況を把握する。

キー・ワード： 良聴耳平均聴力 人工内耳

1 はじめに

新生児スクリーニングによる聴覚障害の早期発見、人工内耳の普及、デジタル補聴器の主流化など、聴覚障害児者を取り巻く環境は変わりつつある。そこで幼児児童生徒のきこえの実態（平成 30 年 12 月現在）を把握し、指導にあたる際に考えられる留意点について考察する。

2 全校の聴力分布及び人工内耳装用の状況

全校幼児児童生徒 232 名における補聴器装用児者の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用児者の人数を Fig. 1 に示した。良聴耳平均聴力の算出の際には 4 分法を用いた。

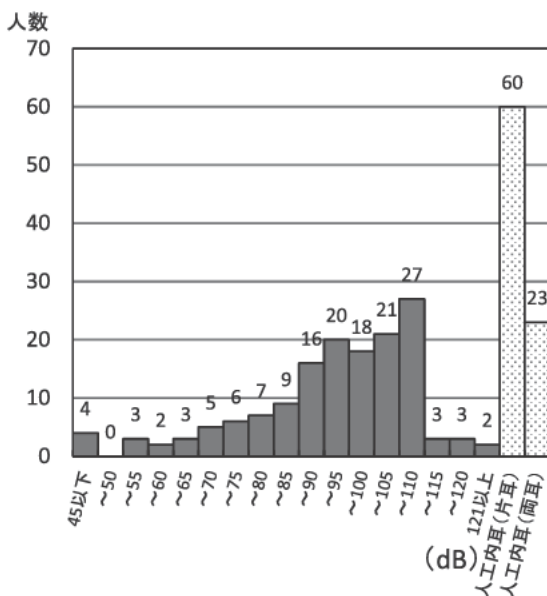


Fig. 1 全校の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用児者数

良聴耳平均聴力が 110dB を超える者は少数であ

ったが、良聴耳平均聴力 90~100dB 台の人数が多くみられた。良聴耳平均聴力が 90dB 以上の補聴器装用児者は 93 名（全体の 40.1%）である。一方で人工内耳装用児者も近年増加傾向にあり、今年度も 83 名（全体の 35.8%）と大きい割合を占める。また、良聴耳平均聴力 89dB 以下の補聴器装用児者も、48 名（全体の 20.7%）在籍している。

ただし、本校には幼稚部から高等部専攻科までの学部・学科があり、それぞれ状況が異なる。そこで、次節で学部ごとの状況について述べる。

3 学部別の聴力分布及び人工内耳装用の状況

今年度の学部毎の在籍児者数、補聴器装用児者数と人工内耳装用児者数を Table 1~5 に示した。また、良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用児者の人数を Fig. 2~6 に示した。

(1) 幼稚部

今年度の幼稚部在籍児数は 23 名である。人工内耳装用児は 3 歳児 5 名、4 歳児 2 名、5 歳児 6 名の計 13 名（全体の 56.5%）で、そのうち 6 名（人工内耳装用児の 46.1%）が両耳装用である。（Table 1）。

Table 1 幼稚部の状況

	3 歳児	4 歳児	5 歳児	計(人)
在籍児数	8	7	8	23
人工内耳装用児数	5	2	6	13
補聴器装用児	3	5	2	10

Fig. 2 に補聴器装用児 10 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用児数を示した。

補聴器装用児の中で、軽度難聴の幼児が 1 名（良聴耳平均聴力 24dB）、中等度難聴の幼児が 4 名、高度難聴の幼児が 1 名、重度難聴の幼児が 4 名となっている。重度難聴の幼児の人数は補聴器装用児の半数に満たず、軽度から高度難聴の幼児が多いことがうかがえる。

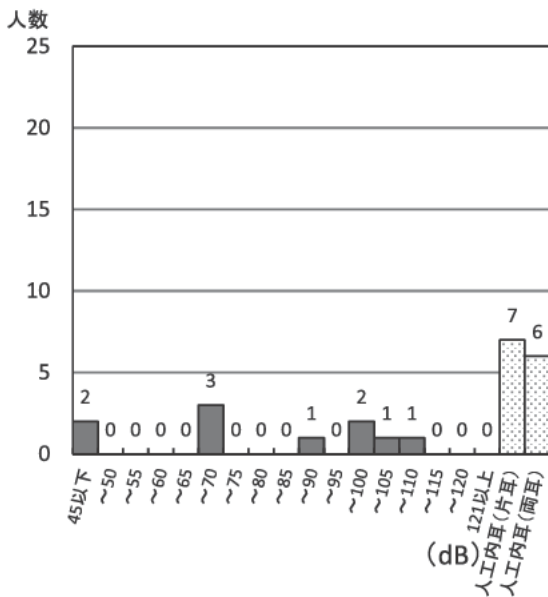


Fig. 2 幼稚部の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用児数

聴覚障害の程度が比較的軽い幼児、及び人工内耳装用児の占める割合が大きく、音声から他者の発話などのおおよそを聞き取っている幼児も少なくないとみられる。ただし、だからこそ、一見理解しているようでも曖昧な部分があったり、視覚から情報を得る意識が育ちにくい場合があったりすることから、様々な配慮が求められる。

また、重度難聴の幼児は部全体で平成 27 年度 7 名、平成 28 年度 7 名、平成 29 年度 6 名、そして今年度 4 名と数の上では近年減少傾向にあるものの、今年度も各学年に在籍している。従来通り丁寧にやりとりを行い、集団での活動や話し合いに参加させ、発言や気持ちを共有する手立てを十分講じていく必要があると考えられる。

(2) 小学部

今年度の小学部在籍児数は 70 名である。人工内

耳装用児は 36 名 (51.4%) で、そのうち 14 名 (38.9%) が両耳装用である (Table 2)。

Fig. 3 に補聴器装用児 34 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用児数を示した。

Table 2 小学部の状況

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	計
在籍児数	10	12	12	12	12	12	70
人工内耳装用児数	7	6	7	1	10	5	36
補聴器装用児数	3	6	5	11	2	7	34

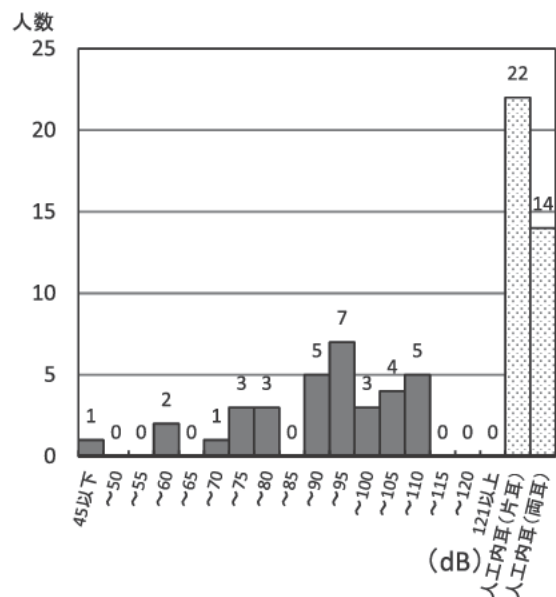


Fig. 3 小学部の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用児数

幼稚部と同様に、人工内耳装用児が過半数になった。幼稚部の状況から考えても、今後人工内耳装用児の占める割合は大きくなっていくと予想される。補聴器装用児の良聴耳平均聴力の分布は幅広い。70dB 以下が 4 名 (11.7%) おり、90dB を超える児童は 19 名 (55.8%) である。補聴器装用児の中に、110dB を超える児童はいなかった。

人工内耳装用児が多くなってはいるが、平均聴力が 90dB を超えても補聴器を利用して聴覚を活用している児童がいることがうかがえる。装用効果については本稿で報告しないが、デジタル補聴器の進歩が寄与するところもあるだろう。補聴効果を得るためには、聴覚管理が欠かせない。補聴器装用児についても、人工内耳装用児についても、家庭、医療機

関等との連携も図りながら、聴覚が十分に活用できるよう指導に努めたい。

(3) 中学部

今年度の中学部在籍者数は 41 名である。人工内耳装用生徒は 15 名 (全体の 34.1%) で、そのうち 2 名 (人工内耳装用生徒の 14.3%) が両耳装用である (Table 3)。

Table 3 中学部の状況

	1年	2年	3年	計
在籍者数	13	14	14	41
人工内耳装用生徒数	4	4	7	15
補聴器装用生徒数	9	10	7	26

Fig. 4 に補聴器装用生徒 26 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用生徒数を示した。

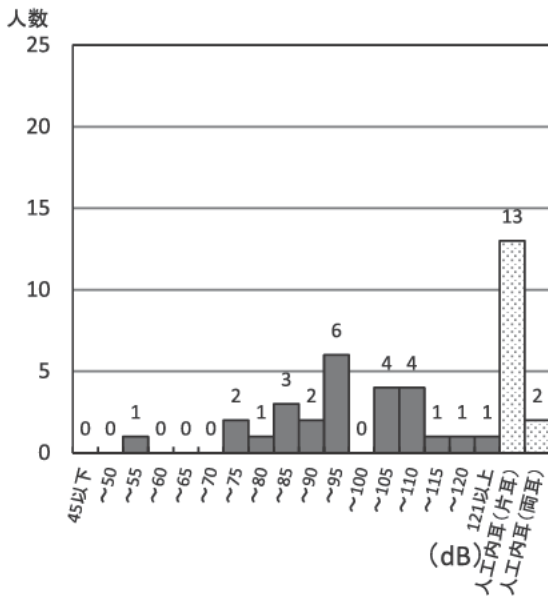


Fig. 4 中学部の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用生徒数

中学部での人工内耳装用生徒の割合は、平成 27 年度 14%、28 年度 24%、29 年度 38.1%と近年増加傾向にあったが、今年度は割合として昨年度から増えてはいない。しかし現在、全国的に幼児・児童期に人工内耳を装用する人数が増えていることを踏まえると、来年度以降、中学部でも人工内耳装用生徒が増えていく可能性がある。補聴器装用生徒の中では重度難聴の生徒が 17 名 (補聴器装用生徒の 65.4%)

と、大きい割合を占める。

現状として良聴耳平均聴力が 100dB 以上の生徒も多く、さらに学習面においても内容が深まり情報量が増えることを踏まえると、聴覚の活用を促しつつも、視覚情報の提示について、引き続き十分考慮する必要があると考えられる。

(4) 高等部普通科

今年度の高等部普通科在籍者数は 69 名である。人工内耳装用生徒は 11 名 (全体の 16.0%) で、そのうち 1 名 (人工内耳装用生徒の 9.1%) が両耳装用である (Table 4)。

Table 4 高等部普通科の状況

	1年	2年	3年	計 (人)
在籍者数	26	22	21	69
人工内耳装用生徒数	8	1	2	11
補聴器装用生徒数	18	21	19	58

Fig. 5 に補聴器装用生徒 58 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用生徒数を示した。

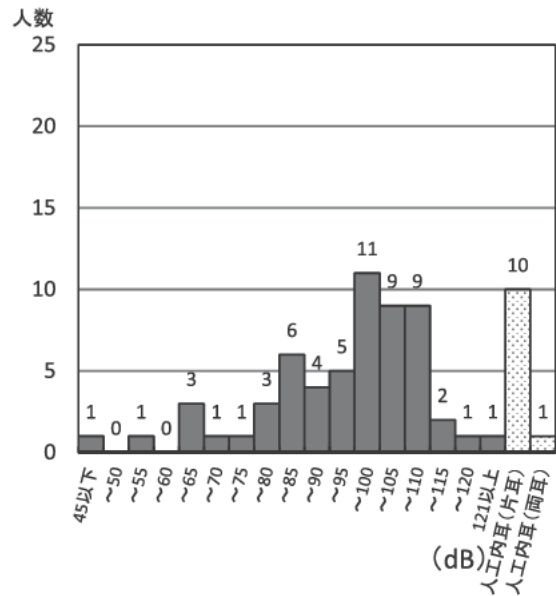


Fig. 5 高等部普通科の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用生徒数

良聴耳平均聴力 90dB 以上の生徒が 38 名と全体の過半数 (55.1%) を占めた。特に 90db 台後半から 100dB 台の人数が多い。割合の上では昨年度 (61.6%) より小さくなってはいるが、依然として

重度難聴の生徒が多い傾向がみられる。人工内耳装用生徒の数は、平成 27 年度では 17 名（全体の 21.5%）、平成 28 年度では 14 名（同 18.6%）、平成 29 年度では 11 名（同 15%）、そして今年度では 11 名（同 16.0%）と推移してきている。昨年度よりは多いが近年増加傾向にはなく、中学部までの学部と比較すると、今年度も割合としては多くない。

指導に際しては視覚情報を充実させ、きこえの程度にかかわらずわかりやすい情報伝達を行っていく必要がある。また一方で、残存聴力を最大限に活用する意識も維持できるよう配慮が求められる。

(5) 高等部専攻科

今年度の高等部専攻科在籍者数は 29 名である。人工内耳装用生徒は 8 名（全体の 27.6%）で、全員が片耳装用である（Table 5）。

Table 5 高等部専攻科の状況

	造形芸術科	ビジネス情報科	歯科技工科	計
在籍者数	5	11	13	29
人工内耳装用生徒数	2	2	4	8
補聴器装用生徒数	3	9	9	21

Fig. 6 に補聴器装用生徒 21 名の良聴耳平均聴力の分布及び人工内耳装用生徒数を示した。

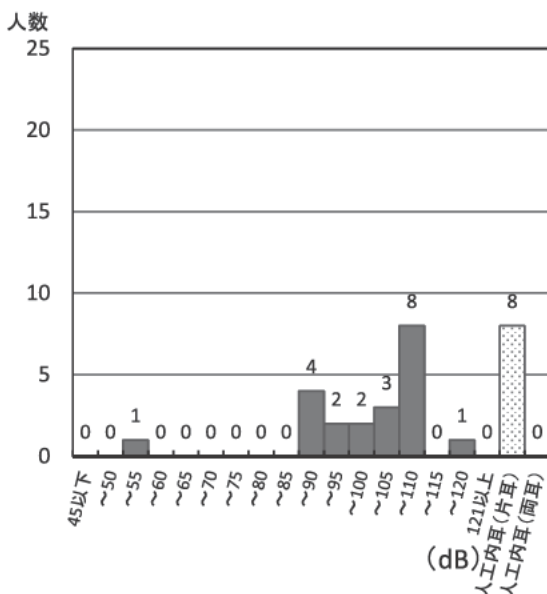


Fig. 6 高等部専攻科の良聴耳平均聴力分布及び人工内耳装用生徒数

良聴耳平均聴力については重度難聴の範囲（95dB以上）を中心に分布している。一方で、90dB以下の生徒は5名と昨年度から微増しており、中等度難聴の生徒（53dB）も1名みられた。

科全体の生徒数は普通科に比して少ないものの、分布傾向は類似しており、求められる配慮事項も共通すると考えられる。

4 まとめ

幼稚部や小学部では、人工内耳装用児数が増え、過半数となった。補聴器装用児の聴覚障害の程度は、軽度から重度まで幅広い。

中学部では、昨年度まで人工内耳装用生徒数が増加傾向にあったが、今年度は増えず、割合としても依然幼稚部や小学部より小さい。補聴器装用生徒の聴覚障害の程度は中等度から重度までみられる。

高等部普通科及び専攻科では、人工内耳装用者の割合が他学部と比べて小さく、補聴器装用生徒の中では聴覚障害の程度が重度の生徒が多い。

学部が上がるにつれて人工内耳装用生徒や軽度から高度難聴の生徒の割合が小さくなり、重度難聴の生徒の割合が大きくなる傾向がみられる。それぞれの学部で、きこえの実態に留意して指導にあたる必要があると考えられる。

また、どの学部においても幼児児童生徒のきこえの実態はその年によって様々であることが考えられるため、実態に即した対応が今後も常に求められる。

〔参考文献〕

鎌田ルリ子・吉野賢吾・佐渡雅人・太田康子・長島素子・奥野功三・石井清一・橋本時浩（2018）平成 29 年度 幼児児童生徒の聴力の実態と取組. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 40, 115-122.
 日本聴覚医学会（2014）難聴（聴覚障害）の程度分類について. 日本聴覚医学会,
<https://audiology-japan.jp/audiology-japan/wp-content/uploads/2014/12/a1360e77a580a13ce7e259a406858656.pdf>（2019 年 1 月 7 日閲覧）